

乳利用のための搾乳はいかにして開始されたか

——その背景と経緯——

谷 泰

1 はじめに

家畜から搾乳することでえられた乳を食資源として利用する。この乳利用技法の開発とその普及が人類史にもたらした意味には、たんに乳製品という新たな食材を食卓に加えたというだけでは語り尽くせない広がりがあると考えられる。それだけに、乳利用の技法がいつ、いかなる背景と経緯でもって発想されたか、またその技法の開発がもたらした意味とはなにかという問題は、考古学者や人類史家だけでなく、文化人類学者によっても繰り返し問われた問いのひとつであった。ただ、乳利用の開始という出来事は、歴史時代以前に起こったものだけに、文献記録に直接的証拠を残さない。そのためこの問いは、ながく想像の域をでないかたちでしか語られてこなかった。そして、この〈いつ〉、〈いかにして〉という問いのうちの前者、乳利用の開始時期が、動物考古学者によって、中近東において出土する残存動物遺骨からの間接的推論をもとに、ある信頼性をもって示されるようになったのは、つい最近のことである。

本論は、このような動物考古学者の成果を前提にしたうえで、乳利用という技法が〈いかにして〉開発されたか、その背景的な経緯を、家畜群の管理、とくに母子関係への管理的介入にかんするこれまで収集しえた知見を参照しつつ、仮説的に再構成することを目的としている。しかもその議論は、すでに発表した新たな〈家畜化の起源論〉ともいえる拙稿「考古学的意味での家畜化とは何であったか」[谷 1995]の続論として位置づけられるものでもある。

ただ、この課題にはいるまえに、これまで考古学者が明らかにしたことを、たんにその結果だけでなく、その結論に到った根拠をも含めて紹介しておく。

2 乳利用のための搾乳の開始時期—動物考古学者の成果

いったいつごろ乳利用の技術は開発され、一般化されたか。中近東の先史遺跡で出土する残存動物遺骨の存在様態の詳細かつ精力的な研究を行った動物考古学者は、少なくとも中近東にかんしては、それがほぼ紀元前5000年紀に開始されたとみなしている [Davis 1984 ; Greenfield 1988 ; Davis 1993 : 3, 5]。しかも彼らは、羊・山羊の家畜化が、ほぼ紀元前8000年紀末(最近年代決定について見直しがなされつつあり、7000年紀中葉という見解が有力視され

つつあるが)に、この中近東ですでに起こっていたことを明らかにしていた。つまり、家畜化の開始から乳利用の開始までのあいだには、少なくとも2000年(あるいは最近の修正的見解に従えば1000年余)の時間的経過が介在しており、この期間はとうぜん搾乳による乳利用がまだまだ行なわれていなかったことになる。そしてこの期間、家畜は肉取得対象として飼養され、母雌の乳は、新生児の良き成育を期待する管理者によって、もっぱら新生児に振り当てられていた。ところが搾乳による乳利用の開始とともに、それまでもっぱら新生児に振り当てられていた母雌の乳の一部が、人の側の食糧として搾取され始める。それを具体的な出来事として記述すれば、それまで新生児にもっぱら授乳を許していた乳雌のまえに、新生児に代わって、その乳房を手でつかみ、自己消費しようという意図をもって搾乳する人が立ちあらわれたことになる。

もちろんこの出来事自体は、動物個体、その遺骨に直接的痕跡を残す事柄ではない。にもかかわらず動物考古学者は、乳利用の開始を残存動物遺骨の存在様態のうちに見いだしたと主張しており、そこには、間接的証拠といえる〈ある考古学的事実〉の発見と、その間接的証拠から乳利用の開始を結論づける〈推論前提〉がある。では、その〈考古学的事実〉と〈推論前提〉とはどのようなものであったか。

まず、残存動物遺骨の存在様態の中に見いだされた〈ある考古学的事実〉だが、それは、ある時期以降—まさにそれが紀元前5000年紀なのだが—からの家畜動物の屠殺年齢の変化、正確にはそれ以前と比較した屠殺年齢分布の一般的な上昇の事実であった。では、この年齢上昇の事実からなぜ乳利用の開始が推論されえたか。

そもそも、この地域での羊・山羊にたいする人の係わり方には、一)狩猟段階、二)家畜化段階、そして三)家畜からの乳利用段階という、いわば三段階が考えられる。そして、この狩猟段階(一)から家畜化段階(二)への移行のさいにも、屠殺年齢分布の変化が認められる。狩猟段階では、幼児は狩りやすいため幼児年齢の事例が少なくない。またアダルトを年齢に応じて狩猟することは難しく、ときに狩り残されて高年齢に達したものがついに狩られることもおこり、消費遺骨の中には、数少ないが高年齢のものもある。ところが、考古学的意味での家畜化時期以降、この幼児の例数が減るだけでなく、3—4才以上の例数がほとんど見られなくなる。ここに成長年齢を超えた個体は間引くという、年齢に応じた計画的な間引き消費戦略の証拠が見いだされる[Ducos 1978 : 54 ; Bökönyi 1969 ; 1989 ; Meadow 1989 : 80-90]。しかも、計画的な間引き戦略が採用されうには、家畜化されてなくてはならない。だからこのような変化がみられる時点で、家畜化段階への移行が起こったと考えたのであった。

ところが年代を降り、ほぼ紀元前5000年紀になると、多くの住居跡で、消費された羊・山羊の屠殺年齢が上昇しはじめ、4才以上まで生かされたのち、ようやく屠殺されるという例数が増加する[Davis 1984, 1993]。考古学者は、ここに、乳利用開始以前の〈もっぱら肉利用を目的とした群管理〉と〈乳利用を目的とした群管理〉とのあいだでの、間引き戦略上の次のような差異の反映を見るのである。

まず、〈もっぱら肉利用を目的とした群管理〉下での間引き戦略について考えてみよう。家畜化とともに、人は群を計画的に管理しうようになり、計画的に間引きができるようになった。ただ、そこで目指されることは、より多くの肉を取得することである。そのような管理戦略下では、成長期をこえてもはや体重が増加しない個体を飼養し続けることは避けられる。というのも、草資源の消費に対する肉の増加率はゼロとなるからである。もちろん、雌のばあいは、成長の停止以後もながく妊娠可能で、所有群の繁殖に貢献する。しかしそのような雌でも、限られた草資源消費に対する肉の生産効率からみれば、より多くのワカ雌に草をあてがうほうが、全体的にみて得だ。こうした経済的判断にもとづく間引き戦略の結果、高年齢のものが少なく、若い段階で間引かれ、一般的にみた間引き年齢の低さが維持されていた。

ところが〈乳利用を目的とした群管理〉が開始されるとともに、雌は、子を生むものとしてだけでなく、毎年の一定期間は連日乳をもたらすものと見なされ始める。こうして、それまで雄とさして違わない時期に間引かれていた雌が、成長期をすぎてもなお間引かれず、搾乳対象となる。ここに、乳利用の開始以後に固有な、雌の間引き年齢の上昇が生ずるはずだ。紀元前5000年紀頃から間引き年齢が上昇するという考古学的事実は、まさに乳利用の開始後に固有な間引きパターンの発生を物語る。

おまけに、時期を合わせたように、皮革の加工に用いられる用具の出土頻度が減少し、織毛に用いる紡ぎ棒の出土例が増加する[Ryder 1993: 9]。乳利用開始以前、もっぱら家畜が肉利用対象として見られているかぎり、殺しのあとに残される皮が重要な副産物と見なされるはずだ。ところが、長く生かして乳を搾取するという戦略の到来とともに、乳だけでなく、毎年取得できる毛への注目が起こったに違いない。皮から織毛への重点移行は、乳利用の開始下での間引き戦略の随伴的結果である。

こうして、残存動物遺骨の間引き年齢の上昇と織毛にかかわる道具の増加という考古学的事実は、「適当な時期に殺して、より効率よく肉を取得すべし」というそれまでの間引き戦略から、「長く生かしておくことによって、毎年えられる搾取対象に注目すべし」という間引き戦略上の移行を間接的に証拠づけるのである。

筆者はこのような考古学者の解釈を妥当なものとする。ただ、残存遺骨は、乳利用の開始とその一般化の時期を確定する材料を提供したにしても、本論の冒頭で掲げた、その技法が〈いかにして〉開発されたか、その経緯についてはなにも語ってくれない。そして、このような問いに答えるためには、残存家畜遺骨からはなれて、別個の回路をへてアプローチするほかないということになる。もちろん、この〈いかにして〉という問いをまえにして、その技法発想の場が、出産後の母子関係への介入の場であつたらうことは、容易に想像できる。ただ、乳利用の開発に間接的と思われる牧夫の母子関係への介入行為といったものは、いかにもエフェメラルで、ものに証拠を残さない。ではどうすればよいか。筆者は以下、繰り返し母子関係への介入を通じて、あらたな雌個体に、そのつど搾乳を許容させることに成功している現在の牧夫の母子関係への介入の実態を参考資料にして、この問題にアプローチすることを試み

たい。

ただ、その作業に移るまえに、筆者は予備的考察をおこない、おもに三つの疑問を提出する。それは、検討すべき問題がどの辺りにあるかを示すばかりでなく、現在の介入資料のどの辺りに注目すべきかをガイドする視点を提供すると思えるからである。

3 予備的考察

まず、乳利用の開始にいたる前史を明らかにしたいという企図をまえにして、起こりうる疑問には、次のようなものがある。

疑問1 一乳利用欠如地域の存在

人は「個体レベルでの人づけ」[谷 1995 : 270]とでもいいうる家畜化を、紀元前8000年紀末(あるいは7000年紀中葉)になしとげた。それによって人は、家畜の身体に触れることを許容するような親和性を当該家畜個体とのあいだに確立しえているはずである。とすれば、人は<いかにして>搾乳という技術を開発することができるようになったかなどという問いを、なにもわざわざ立てる必要があるのか。つまり家畜化された動物を親和性をもって身元にとどめうようになった人にとり、搾乳による乳利用開始に到る道は平坦な必然の道ではなかったのか、というのが第一の疑問である。

ただ、このような疑義に対しては、家畜化が実現され、人と家畜種とのあいだに親和性が成立していても、地域によっては搾乳による乳利用という発想に到らなかった事例があるということがまず指摘されうる。たとえば、中近東やインドの家畜飼養者ならば、搾乳を行ない、そこから乳を獲得している牛や水牛を、東南アジアからオセアニアにかけての人々も、ながく飼養してきた。しかしかれらは、それらから搾乳することをしなかったのである。このような事実をみると、家畜化とともに成立したはずの人と当該家畜種とのあいだの個体レベルでの親和性は、搾乳による乳利用技術の開発にとっての必要条件とはなりえても、けっして十分条件とは言えないことを示している。もちろんここで、家畜を飼養しながら乳利用しない理由として、オードリークールのように、乳利用をめぐる地域に応じた文化的価値づけといった要因を指摘して、乳利用欠如理由を説明することも可能ではある[Haudricourt 1977 ; 1978]。しかし、このような説明は、食資源としての乳利用というものを前提としたうえで、それに対する文化的評価を云々するものである。ここでもし、これらの乳利用欠如地域において、乳利用の開始前提、搾乳という技法が発想される条件が欠如していたということが言えたとすれば、どうだろう。乳に対する文化的価値づけの差異を云々する以前に、搾乳の技術の発想を誘発する条件の有無の問題があるということになる。

疑問2 一乳雌の習性的・生理的制限

おまけに、少なくとも中近東の牧民の搾乳現場を詳しく観察したものなら、牧夫がけっして、やにわに乳雌をとらえて乳房をにぎり搾乳し始めているのではないことを知っている。普通

われわれは、搾乳という行為を、親和性があればいかにも簡単に達成できるものだと見なしがちだ。しかしそのようなことをしても、本来的には実子だけにしか授乳を許さない乳雌は、その介入の手を回避するのがおちである。しかも近代改良種をのぞけば、牛では、実子なしには乳腺は開かない。本来的には実子にだけ哺乳を許容するという乳雌の習性的な条件、そして実子なしには乳腺が開かないといった生理的な条件をクリアーする技法が搾乳には存在し、その技法の開発によってはじめて、牛の搾乳は実現可能になっている。乳利用を食資源として利用し始める以前の問題として、いかにして乳雌に搾乳することを許容させたか、その技法の開発が問題となる。歴史的に最初に家畜から搾乳をしようとした人が、はたして「家畜の乳を飲む」という動機に駆られて搾乳を試みたのかどうか。この点も、後に触れるように問いなおす必要がある。ただ、そのような「家畜の乳を飲む」欲望にたまたま駆られ、搾乳を試みた人があったとしても、乳雌のうえに述べたような習性的、生理的制限をクリアーする知識がなければ、それは不発に終わったはずなのである。このように考えると、搾乳の技法というものの発想がいかにしてえられたかという問い、具体的にはこの乳雌の習性的・生理的制限をクリアーする知識はいかにしてえられ、それはどのような管理状況の場で獲得されたかという問題が、さきに検討されなければならない。そしてこの辺りの問題を検討することは、搾乳の開始にいたる背景と経緯を明らかにするという課題に資するだけでなく、可能性としては乳利用欠如地域での欠如理由をも説明する参照資料となりうると思われるのである。

疑問3—食糧としての消化上の問題

クリアーされなくてはならない問題はそれだけではない。さきに、歴史的に最初に家畜から搾乳をしようとした人が、はたして「家畜の乳を飲む」という動機に駆られて搾乳を試みたのかどうか、という問いを提出しておいた。この点に関して、家畜の生乳は、それ自体では食糧として適したものではないという事実がある。いまここに、最初に家畜の乳を搾った人がいるとして、もしその人が生乳を飲んだとしよう。その乳は多量の乳糖をふくんでいる。ところで人は、離乳とともに、乳糖分解酵素の活性が低下する。そのような条件下で生乳を飲むと、この乳糖値の高さによって、人は消化不良を起こすのである [Scrimshaw & Murray 1990]。

もちろん、この乳糖分解酵素の活性レベルの低下に関して、現在乳利用をしている地域、ヨーロッパや東アフリカの人々は、乳糖分解酵素の活性が、大人になっても高く維持されているということが知られてはいる [Scrimshaw & Murray 1990 : 6-20]。このことから、このような乳糖分解酵素の活性を維持する地域の人が、最初に生乳を飲むことを試みたのであって、消化上の問題はなかったという考えも成り立ちはする。しかしこの活性レベル維持の問題は、むしろ当該地域の人々がながいあいだにわたって乳利用をしてきたことの結果であり、なかなか離乳期以後も持続して家畜の生乳を飲むか否かという、人の離乳過程の文化的な差異によっても、乳糖分解酵素の活性の高さが決められている可能性が検討されている。特定地域において認められる乳糖分解酵素の活性レベルの高さは、乳利用以後の食習慣によって発生した可能性があるとするれば、最初に家畜の生乳を飲むことを試みた人々の問題を考えるに

さいしては、意味をもたない。おまけに家畜の乳をはじめて飲もうとした人がいたとして、異なる種に属する哺乳類の乳は、飲みなれないかぎり、最初は美味しいものとは思われなかったはずなのである。これらのことを考慮するとき、欲望の赴くままに家畜の生乳を飲むものがいたとしても、その試みののち、直ちに飲乳の慣習がスムーズに展開したとは考えられない。

以上、家畜化によって成立した肉獲得を目的とした家畜管理段階から、乳利用のための搾乳を達成する段階にいたるまでのあいだでクリアされなければならない問題がどの辺りにあるかを、二つの側面から指摘した。そのひとつは、搾乳される母雌の側に見いだせる習性的・生理的条件がもたらす問題性を、いかなる技法をもってクリアしたかという問いであり、もうひとつは乳糖がもたらす人の側の生理的条件をいかにクリアしたかという問いである。

もちろんこの後者、乳糖が消化上の困難をもたらすという点は、乳を自然放置しておくことによって、酸乳化させ、乳糖の分解をまつという方法によって、容易に解決される。なんらかの動機で、ある時点で人が搾乳に成功したとして、その人が、たまたまそれを放置しているあいだに酸乳化した。そしてその酸乳をたまたまだれかが食べることで、その人間的利用の可能性が発見されたと考えることもできる。おそらくそうであろう。ただこのように考えると、乳の人的利用の可能性の発見以前に、すでになんらかのかたちでの搾乳行為があつて、その搾りおかれた乳の利用可能性が発見されたという想定がなされねばならない。言い換えると、乳利用の可能性を知らない人による〈乳利用を目的としない搾乳〉というものがまえもって存在したことを措定する必要が生ずる。乳利用の開始の背景と経緯という、乳利用の開始の前史を再構成するというテーマは、こうして、〈乳利用を目的としない搾乳〉がいかにして開始されたかという、一見想定されそうもない出来事の所在をさぐる作業へと、われわれを導く。しかもわれわれは、搾乳が可能になるためには、搾乳される母雌の側に見いだせる習性的・生理的条件がもたらす困難をクリアする技法が開発されなければならなかったことを、すでに知らされている。〈乳利用を目的としない搾乳〉を最初に行った人もまた、この問題をクリアした人でなければならなかったはずだ。こうして、搾乳を介した乳利用の開始に到る前史を再構成するという試みで、行わなければならないことは、〈乳利用を目的としない搾乳〉はなんのためになされたか。そのような搾乳をした人は、母雌の側に見いだせる習性的・生理的条件がもたらす困難を、いかにクリアしたか。そのような困難をクリアする技法はどのような状況で発想されたかという問いを問題溯及的に追求する作業になる。

4 乳利用のための搾乳開始の背景と経緯

〈乳利用を目的としない搾乳〉は存在するか

乳利用を目的とした搾乳とは、本来ならば実子に与えるべき乳を、自然な母子間の授乳・哺乳関係に介入することで、人間の側が横取りすることである。ただこの乳利用を目的とした搾乳は、子が生まれ、母雌が乳を出すようになってただちに開始されるものではない。牧夫は

まず、出産以後の一定期間、実母と実子との授乳・哺乳関係を一方的に許容する。そして、子があるていど成長して、やわらかい草をはむようになってから、部分的搾乳を開始する。そしてやがて新生児が、もっぱら草のみで済ますことができるようになるのと離乳し、本格的な搾乳を開始する。いつ乳利用のための搾乳を本格的に開始するか。その時期は、新生児の良き成長を期待して、もっぱら乳雌の乳を子に振り向ける必要と、人の側により多くの乳を搾取する欲求と、相互背反、かつ両立させねばならぬ要請の間で、時差をもって、子の成長度を目度で定まる。こうして乳雌への牧夫の関与を時期的に区分すると、1)新生児の良き成長を期待し、乳雌の乳をもっぱら新生児に振り向けることを許容する前期、2)哺乳を並行して行なうことを排除しないが、乳の搾取意図をもって乳雌から乳を搾取し始める後期に二分され、それは搾乳を行なう家畜群管理の乳雌への関与の基本パターンになっている。

ところで、このような関与の前後区分を認めたくえて、ここでひるがえって、搾乳による乳利用が歴史的に開始される以前の時代を想定し、そこでの牧夫の母子関係への関与状況を考えてみよう。いまだそこに人の側の搾取動機はない。とすると、牧夫は、新生児の良き成長を期待し、もっぱら母雌の乳を新生児に振り向けていたことになり、現在の家畜管理での搾乳開始以前、新生児の哺乳がもっぱら目指される前期状況だけがあったはずだ、ということになる。そこでもし、牧夫がいまだ乳利用のための搾乳を開始していない前期状況で、＜乳利用を目的としない搾乳＞が見いだせたとしたらどうだろう。それこそが、人的利用のための搾乳が歴史的に開始される以前に想定される＜乳利用を目的としない搾乳＞である可能性が生じ、そこでの搾乳動機が、遠い歴史的過去における乳利用の発見以前に行われていた＜乳利用を目的としない搾乳＞の動機だということになる。

そこで、まだ乳利用のための搾乳を開始していない前期、もっぱら子への哺乳を許容する出産期の牧夫の母子関係への関与に目を向け、この点をチェックしてみよう。

まず、出産直後に、なによりもまず牧夫が関心を向けることはなにか。それは、出産直後の母子間で幸いな授乳・哺乳関係が確立することである。家畜化とともに、人は群をキャンプ地に繋留し、母雌を日帰り放牧に出すということをはじめた。その結果、1—a)放牧中に出産した母子は、母子の相互認知が不安定で、さいわいな授乳・哺乳関係が成立しにくい。また、1—b)キャンプ地への繋留によって、多数の乳雌たちが塊りあっているところで、授乳・哺乳のための母子相互邂逅がなされることになるのだが、たとえ相互に鳴きあって近づこうとしても、実子が実母のところにとどり着けない。1—c)初産の母雌は実子にたいしてさえ授乳を拒否する傾向がある。こうして牧夫は、母子の相互認知・相互邂逅が成立しない実子を抱えて、実母の乳房に押し当てる、いわゆる＜実母・実子間の授乳・哺乳介助＞を、家畜化の代償として繰り返している(この出産期の牧夫の母子関係関与の詳細は、別稿[谷 1995]を参照)。

ただ、授乳・哺乳介助は、実母・実子間についてだけなされるものではない。いずこにおいても、授乳を拒否する母雌というものがいる。また実母が出産時に死亡し、孤児になる子とい

うものが発生する。このようなとき、放置していれば子は死亡する。ここに、2)実母でない他の乳雌から孤児が哺乳できるよう、〈乳母づけ〉という授乳・哺乳介助が行われる。この乳母づけの方法には種々あり、まず一般的に採用される方法は、当の乳母の子宮に手を突っ込んで、その液を孤児に塗り付けたり、実子の尿や死んだ実子の皮などを孤児にこすりつけることである[イタリア中部：Trinchieri 1941：83；イラン・カシュガイ：Beck 1991：106；トルコ・ヨルック：松原 1983]。いやそれでも〈乳母づけ〉できないときには、狭い柵に乳母と孤児とを閉じ込め、強制的に養子関係を確立する。また許容度の高い母雌には、実子に加えて、見捨てられた孤児を近づけ、二頭の新生児に同時に哺乳を許容させることもある[Beck 1991：106；小長谷 1991b：79-80]。孤児となった子の幸いな成長を期待するがぎり、これら〈乳母づけ〉のための介助は必須で、出産後の管理行動の重要な要素をなしている。

しかも、これらの方法を適用しても乳母づけができないこともままある。このようなとき牧夫はどうするか。かれらは、3)他の母雌から乳を搾って、それを孤児に人工哺乳するのである。古い証拠ではないが、現在でもスイスには、牛の新生児に人工哺乳させるための、木製の哺乳具がある[小林 1990：18]。また小長谷は、実母が放牧中に行方不明になってキャンプに帰還しなかったり、母親が死んだりしたとき、搾乳した乳を哺乳瓶でその子に哺乳する事実を、モンゴルにおける事例として報告している[小長谷 1991a：68]。人工哺乳は、このような目的以外にも、出生間もない時期に強い親和性を牧夫との間に確立し、群の誘導に役立てる、初期的タイプと見なしうる誘導羊の養成の際にも行われる[Tani 1982：14-15]。

以上、乳利用のための搾乳を開始するまえ、いわゆる前期に、牧夫が母子への授乳・哺乳関係介助をおこなう三つの状況と、その介助内容を述べた。そしてその最後のものとして、乳母づけを行っても授乳・哺乳関係が成立しない状況下で、牧夫が他の母雌から乳を搾り、それを孤児に人工哺乳することを指摘したが、これこそ、搾乳開始以前に行われる〈乳利用を目的としない搾乳〉といわずに、他になんとはいえよう。まさに〈乳利用を目的としない搾乳〉というものは存在し、歴史的に乳利用のための搾乳が開始される以前において措定された〈乳利用を目的としない搾乳〉とはそのようなものである。そしてそれは、乳母づけできない〈孤児となった新生児への人工哺乳〉という動機から行われていた。以上の考察は、こういう可能性を示唆している。

ただ、本格的な乳利用のための搾乳開始に先行して、たとえ〈孤児となった新生児への人工哺乳〉という動機があったとして、搾乳は、動機だけでは成立しない。われわれは、少なくとも近代の改良種以前の牛について、搾乳しようとする乳雌の乳房をいきなり搾っても乳は出ないことを知っている。また羊・山羊でも実子以外のものに哺乳を許容することを嫌う傾向があり、いきなり乳房を握ろうとしても、忌避されるのがおちである。いまそれを〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容忌避傾向〉と呼ぶことにして、〈孤児となった新生児への人工哺乳〉を実現するには、この乳雌の生理学的・習性学的傾向がもたらす困難をクリアするなんらかの方略が見いだされなければならない。そのような方略はどのようなものであったか。

またそのような方略はどのような状況でまず採用されているか。この点を次に検討しよう。

催乳技法の諸相

ここでまず、牛にかんして採用されており、これまで、もっぱら乳利用のための搾乳の技法と見なされている催乳の技法というものに目を向けることにする。

いま雌の乳牛から搾乳をしようとする牧夫というものがいるとする。かれがまず行なうことは、搾乳しようとした乳雌の実子をひきだして、乳雌に近づける(あるいは直接的に哺乳させる)ことである。それによって、しかもそれによってのみ、乳雌の乳腺はひらく。それは排他的に実子のみ授乳するという乳雌の一般的習性による。牧夫はこうして、実母・実子間の授乳・哺乳状況を意図的につくりだす。そして乳腺が開いたところでやおら実子を引離して搾乳する。いったん乳腺は開いている以上、この催乳という欺瞞を介した搾乳行為は忌避されるものとはならず、乳雌は、実子以外のものである人の搾乳を許容する[Amoroso & Jewell 1963]。催乳とは、〈実子への授乳状況の見立て〉を介して、〈実子以外のもの[搾乳意図をもった人]への乳雌の授乳許容態度を誘発する〉技法なのである。そして、この乳牛への催乳という、実子をおとりに使った搾乳技法は、旧大陸をはじめアフリカでも一般的にみとめられるばかりでなく[Amoroso & Jewell 1963; 梅棹 1966: 423-463; 松原正毅 1983: 67]、古くは古代シュメール時代の家畜管理の状況を描いた図像表現からも、この催乳の技法の存在が知られている。技法分布の広さとその歴史的古さは、催乳技法が、〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容忌避傾向〉という牛の乳雌の生理的条件に由来する搾乳上の困難をクリアする、きわめて基礎的技法であったことを示している。歴史的にはじめて牛から搾乳をおこなった人は、この催乳の技法をすでに採用していたと見なしてよいだろう。

ところで催乳は、もっぱら牛の搾乳をおこなうさいに必要な技法として語られるだけで、羊・山羊からの搾乳において、催乳は必要ないかのように思われている。しかし、羊・山羊について、本当に〈実子への授乳状況の見立て〉を演出することなく搾乳がなされていたかどうかには疑問がある。筆者は、牛への催乳にも匹敵する、次のふたつの事実をここで指摘したい。

そのひとつは、いづこの羊・山羊の飼養者においても認められる慣習的技法で、搾乳しようとする乳雌を前にして、牧夫は、いきなり乳房をにぎって搾り始めるのではなく、まず乳房を手で突き上げてから搾り始めるという事実である。この動作には、実子が乳房を口で突き上げて哺乳を始める、その突き上げ刺激の模擬的な見立てがある。

それに加えて筆者は、中近東ではなく、イタリア中部山村で観察したことだが、授乳・哺乳介助のさいに慣習的に発せられる声と同じ声が、搾乳のさいにも乳雌に対して発せられるという事実に注目したい。搾乳は、朝晩二回、乳雌を搾乳柵に追い込んでなされていた。搾乳柵には、一方所だけ開口部があり、牧夫は、その開口部のわきにしゃがみこんで待機する。そして柵内の追い手によって、開口部へと追いたてられた羊が、開口部から外に出ようとするとき、搾り手は羊の足をつかみ、ついで乳房をつかんで搾乳する。ところが、まさにその乳房をつか

もうとすると、牧夫はあたかも母雌が従順に搾乳許容することを期待し、それを促すかのように、「チュッチュッ」という吸気音を発する。しかもその後、いづこの牧民もおこなう出産後の実母・実子間の授乳・哺乳関係介助場面に居合わせる機会をもったが、牧夫は、哺乳させた新生児を小脇にかかえこみ、実母のもとに近づいて、その腹に子を押し込むときにも、搾乳時に発していた「チュッチュッ」という音声を等しく発していた[谷 1977: 143-146]。いまこの音声上的一致を、〈授乳・哺乳介助〉と〈搾乳〉時点での牧夫が立てる音声的一致と呼ぶことにして、同様のことは、その後モンゴルの牧民を調査した小長谷からも報告された。山羊には「チャイグ」、羊には「トイグ」という間投詞的な音声を、〈実母・実子間の授乳・哺乳介助〉、そして〈搾乳〉のさいに、乳雌へのかけ歌とともに発声するのである[小長谷 1991b: 149]*¹。

ここで、〈授乳・哺乳介助〉と〈搾乳〉時点で牧夫が同じ音声を発することの効果を考えてみる。〈授乳・哺乳介助〉は〈搾乳〉に先行してなされる。つまりこの音声は、〈授乳・哺乳介助〉場面でまず乳雌にたいして発せられている。もちろんこの音声自体に、母雌に授乳を促す力は本来ない。ただ、毎日おこなわれる授乳・哺乳介助時点で、乳雌は繰り返しこの音声を聞かされ、それとともに実子に授乳を許容している。こうして乳雌は、その音声を聞くことで授乳許容へと促されるという条件づけをうける。そのうえで、この音声が〈搾乳〉の場でも発せられるとしたらどうだろう。乳雌は、その条件づけによって授乳許容へと促され、搾乳を容易に許容することになる。さきに、牛への催乳を、〈実子への授乳状況〉を見立てとして偽装することで、〈実子以外のもの[搾乳意図をもった人]への乳雌の授乳許容態度を誘発する〉技法とっておいたが、ここにも方法は異なるが、おなじ効果を期待しつつ乳雌に関与する搾乳者の催乳的介入の姿を見いだすのである。上記の事実は、従来牛の生理的条件によって発生した技法と見なされてきた催乳技法が、牛だけでなく、羊・山羊にも適用されただろうことを暗示している。

催乳技法の原点—孤児への乳母づけ

さていま、催乳効果をもつ牧夫の関与が、牛だけでなく、羊・山羊から搾乳を行う時点でなされていることを認めたくえて、このような関与が、はたして搾乳を開始する段階になってはじめて発想されたものなのだろうかということ疑ってみてよい。いま、〈授乳・哺乳介助〉と〈搾乳〉と、ふたつの時点でおなじ音声をたてる催乳技法というものを見てみよう。それは時間的順序を異にする二つの音声的介入からなっており、前者の介入があってはじめて、後者が意味をもつ。つまり条件づけのうえで、当の音声が〈実子への授乳状況の見立て〉として働きうるようになったうえで、それを〈搾乳〉状況に拡張適用し、〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容態度を誘発する〉ことが可能になっている。ここで、このような〈実子への授乳状況の見立て〉によって、〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容態度を誘発する〉という戦略内容をもった技法が、搾乳の開始時点以前、他の必要で用いられているとしたらどうだろう。われわれは、そのような状況で用いられている催乳の技法を前段階とし、乳利用のた

めの搾乳時に採用される催乳を、その延長上で生まれた事後的適用とみなしてよいことになる。

いま、この点を検討するべく、まず、歴史的に最初に乳利用のために羊・山羊から乳を搾った人(それは出産後の授乳・哺乳介助のひとつ、孤児への人工哺乳のために搾乳した人だということになったのだったが)を想定し、その人が、催乳の技法を採用して搾乳をする時点でもっていた知識というものを考えてみたい。かれは、「乳雌の乳腺は実子を近づけなくては開かない」という前提知をもっていなければならない。しかもその知識にもとづいて、「実母・実子間の授乳・哺乳状況を見立てとして意図的につくりだせば、乳雌の乳腺はひらき、乳雌はそのまま[搾乳意図をもった人]への授乳を許容する」という技術知をうるに到っている人でなければならない。

ところで他方、搾乳以前の時点、つまり母子間の授乳・哺乳関係への介助の時点において、うまく授乳・哺乳関係が成立しない孤児に乳母づけすべく、実子の尿をこの孤児に塗り付けるという技法があったことを想起しよう。このような牧夫は、「乳雌の乳腺は実子を近づけなくては開かない」という前提知をもって、「実母・実子間の授乳・哺乳状況を見立てとして意図的につくりだせば、乳雌の乳腺はひらき、乳雌は実子以外のもの[孤児]への授乳を許容する」という技術知を採用している。

たしかに<搾乳意図をもった人に授乳を許容させる>ための催乳と<実子以外の孤児に授乳を許容させる>ための催乳と、それぞれが達成しようとしている目的に差異はある。しかし、両者には共通して、1)<実子以外のものへの乳供給を乳雌に許容させる>という意図を隠したまま、2)<実子への授乳状況の見立て>を現出すれば、3)乳雌の授乳許容態度は誘発され、4)孤児となった新生児であれ、搾乳を意図した人であれ、<実子以外のもの>に乳供給を許容するという知識がある。しかも歴史的にみたとき、<搾乳>のための催乳と<実子以外の孤児への授乳>のための催乳と、どちらがさきに案出されたかという点、後者を許容させるための催乳が先であることは言うまでもない。催乳というと、われわれは、乳利用のための牛からの搾乳の技法であると見なしがちだが、うへの検討は、催乳に関する技法とその基礎にある知識が、<実子以外の孤児への授乳を許容させるため>に、搾乳以前にすでに知られていたという考えを支持するのである。

牧夫は、出産期以後、個々の母子ペアにたいして、必要とあらばその都度、実母・実子間の授乳・哺乳介助をおこなう。ところで、このような介助状況で、かならず出産期に母雌が死んだり、どうしても授乳を実子に許容しないために孤児となった新生児というものが出現する。牧夫がそこで行なわねばならないことは、すでに指摘したように、<乳母づけ>することであった。そこで牧夫が具体的におこなうことは、ひとつには、実際に<実子への授乳状況>を現出し、哺乳中の実子をやおら引き離して、当の孤児を乳母候補の乳房に押し付ける。あるいは引き離すことなく、それに加えて、さらにもう一頭の孤児を押し付けて哺乳させることであった。そしてもうひとつには、あたかも<実子への授乳状況>をほうふつとさせる見立て

を介して、〈実子以外のものへの授乳許容〉を誘発することであり、実子の尿を孤児に塗るのがそれに当たる。そして、もう一段、間接的な見立てとして、〈実子への授乳介助〉で発せられる音声と同じ音声を、〈乳母づけ〉においても発する技法があった。もちろん、この最後の特定の音声をたてたり、歌をうたうとき、牧夫の心にだまそうという意図がある必要はない。かれは、乳雌が実子にたいしてであれ、養子に対してであれ、ともに快く乳雌が授乳を許容するよう期待して、声を立て、歌をうたうだけでよいのである。それは結果として〈実子への授乳状況〉の見立てとして機能する。ちなみにモンゴルだけでなく、イランのカシュガイでも、乳母づけにおいて、リズムカルな音声とともに歌をうたうという報告がある [小長谷 1983 : 1991 a ; 1991 b : 79, 249 ; Beck 1991 : 107]。そして、哺乳している実子を引き離して孤児を当てがうのであれ、実子の匂いをつけるのであれ、音声の同一であれ、乳雌の立場に立てば、彼女は、それらを実子への授乳状況と誤認して、授乳を許容するのである。要は、〈乳母づけ〉におけるこれらの慣習的介入で起こっていることは、〈実子への授乳状況〉が〈実子以外の孤児への授乳〉時点において見立てとして現出されることで、〈実子以外のものへの授乳許容〉が実現しているということなのである。このようにみえてくると、〈実子への授乳状況の見立て〉による〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容態度を誘発する〉という関与は、〈孤児となった新生児への人工哺乳のための搾乳〉以前、〈孤児となった新生児への乳母づけ〉においてすでに行われていることになる。

以上述べたことを要約しよう。催乳は、従来〈実子への授乳状況の見立て〉を介して牛から搾乳を達成する技法と見なされてきた。ところが、この催乳の技法は、牛にだけではなく、羊・山羊の搾乳のさいにも適用されている。しかもその搾乳は、それが人工哺乳のためであれ、催乳の技法は知られてなくてはならない。ところでいまこの技法を、〈実子への授乳状況の見立て〉を介して〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容態度を誘発する〉技法と読み替えるとき、それは、実子以外の〈孤児〉への乳雌の授乳許容を誘発する乳母づけにおいてすでに適用されていた。まさに催乳の技法の原点は、出産時の一連の授乳・哺乳介助状況の場であり、〈孤児となった新生児の乳母づけ〉という孤児救済の緊急要請のもとでその技法は成立したものだ、ということになる。

乳母づけから人工哺乳へ

もちろんこれだけを指摘しただけでは、乳利用の開始以前において、実子以外のもの〈孤児〉への乳雌の授乳許容態度を誘発する、新生児への哺乳のための催乳が行われていたことを指摘しただけであって、搾乳の開始を説明したことにはならない。ここに、実子以外のもの〈孤児〉への乳雌の授乳許容を引き出す関与から、実子以外のもの〈搾乳意図をもった人〉への乳雌の搾乳許容を引き出す関与への道が、いかにして開かれたかということが語られなくてはならない。

ただそれについては、われわれは、歴史的に最初に搾乳を行った人は、〈乳利用以外の目的での搾乳〉を行った人でなければならないという前提をすでに立てていた。そしてそのよう

な搾乳は、どうしても〈乳母づけ〉ができない〈孤児となった新生児の人工哺乳〉という動機からなされただろうことを、孤児となった新生児への人工哺乳という事実から予想しておいた。授乳を拒否される子、また実母が出産児に死亡したために孤児になった子に、他の乳雌を乳母としてつけるために、狭い柵にそのペアーを閉じ込めて、乳母・養子関係を確立させようとする技法もあり、〈乳母づけ〉というものは、必ずしもつねに容易に成功するものとは限らない。このようなとき牧夫はどうすればよいか。すでに牧夫は、〈実子への授乳状況の見立て〉を介して、〈乳雌の授乳許容態度を誘発する〉ことで、〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容〉が実現されるという知識を、〈乳母づけ〉のさいに援用している。この知識にもとづいて、〈実子への授乳状況の見立て〉をおこない、孤児の身代わりになって、牧夫が乳房を搾ればよい。具体的には、実子への授乳時に発していた音声とおなじ音声を発しつつ、哺乳する実子の乳房の突き上げと同じ身体刺激を与えるべく、乳房を突き上げて搾乳する。そして、その搾った乳を、乳母づけのできなかった孤児に、人工哺乳する。〈乳母づけ〉時点で用いられた催乳の技法の、〈人工哺乳のための搾乳〉への移行拡張は、〈乳母づけ〉が失敗したときの緊急措置としてなされたと考えたい。

人工哺乳から乳利用へ

ところで、最後の問題は、すでに述べたように、搾った乳を飲んだのでは消化上の困難をとまうという事実である。〈孤児への人工哺乳のための搾乳〉から〈乳利用のための搾乳〉の開始への最後のステップは、なにもスムーズに移行する、当然の過程ではなかったはずである。ところでわれわれは、技術上の展開を、つねに先に実現目標があって、その前にはだかる困難をクリアーする過程として想定しがちである。しかし発見はつねにこのような目的を前提して起こるとはかぎらない。実際に起こったことはむしろ、すでに述べた、次のようなことであったと考えたい。

人は、すでに孤児となった新生児の人工哺乳のために、〈乳利用を目的としない搾乳〉をおこなっていた。ところでその搾りおいた乳は放置されると酸乳化する。それを子どもなどがつい食べることで、その有用性がたまたま発見されたという経過である。ちなみに、搾乳がもっとも早く開始されたとされる中近東の地域で、遅く家畜化がなされたラクダを除けば、家畜の乳を生のまま飲むことは稀である。この地域の牧民たちは、羊・山羊から搾った乳はすべて酸乳化して消費している。初期の乳利用は、おそらく加工されたものであった可能性は高いのである。

*1 〈授乳・哺乳介助〉時点と〈搾乳〉時点で立てる音声の同一に注目し、それを搾乳の開始にいたる前史として重視したものは少ない。現在のところ谷 1977と小長谷 1991 b くらいではないかと思われる。

5 おわりに

搾乳を介した乳利用が、中近東で紀元前5000年紀に開始されたことは、動物考古学者による残存動物遺骨の存在様態の子細な研究によって、ほぼ明らかにされていた。ただ骨は、このような技法の開発がいかになされたか、その背景と経緯についてはなにも語ってくれない。本論は、この〈いかにして〉という、乳利用の開始に到る前史を再構成するという課題に答えることであった。

もちろんこのような乳利用の技法が開発された現場は、牧夫の群介入のなかでも、なによりも出産後の母子関係への介入の場であっただろうことは想像に難くない。ただ、乳雌というものは、本来的には実子にしか授乳を許容しない。これを〈乳雌の実子に対する排他的な授乳傾向〉からくる困難と呼ぶことにして、搾乳はこのような問題性をクリアーする技法の開発を前提とする。しかもこの〈乳雌の実子に対する排他的な授乳傾向〉は、現在の羊・山羊においても等しく認められる。にもかかわらず牧夫は、この本来的には実子にしか授乳を許容しない乳雌となった個体に、そのつど介入をすることで、搾乳許容を勝ち取っている。とすれば、彼女に対する牧夫の介入のうちに、搾乳を巡る困難をクリアーする鍵となる行為群が潜んでいるのではないか。こう考えて、筆者は、出産後の乳雌への介入技法に関する知見を参照項とし、乳利用の開始にいたる過程の再構成を試みたのであった。

もちろん、この地域では、家畜化以後、もっぱら肉取得のためであれ、群を人のキャンプ地に繋留し、日帰り放牧を行う、「個体レベルでの人づけ」とでもいえる家畜化に成功していた。いったいこの家畜化で、どのようなことが起こったか。筆者は、それを別稿で、人と家畜群との一連のインタラクショナルな関係での出来事連鎖として記述し、そこで生ずる母子の授乳・哺乳関係の不安定化を補償するための〈授乳・哺乳関係介助〉というものの発生を指摘しておいた。

ところでこの母子の〈授乳・哺乳関係介助〉というものは、本来的には実母と実子との紐帯を確実なものとすることで、新生児の良き成長を期する介入なのだが、このような場において、かならず孤児というものが発生する。こうして孤児への乳母づけという副次的介助も、牧夫にとっての重要な介助行為の要素をなしている。筆者は、この孤児への乳母づけという介助行為にまず注目し、そこで乳母づけを行う牧夫の介入行為のなかに、従来乳利用のための搾乳の技法として考えられている催乳の原型があり、〈実母・実子間の授乳・哺乳状況〉の見立てを介して、〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容を誘発する〉ことができるという知識がすでに利用されていることを指摘したのだった。こうして、乳利用のための搾乳技法を発想するにいたる前提として、1)〈催乳を介した実子以外の孤児への乳雌の授乳許容〉という〈乳母づけ〉技法というものをまず設定した。そしてこの技法を適用しても乳母づけができない孤児への緊急措置として、2)〈孤児への人工哺乳〉を目的とした、〈催乳を介した実子以外のひとへの乳雌の授乳許容〉がなされることになった。いずれの技法も、実子以外の孤

児へ哺乳を達成するためのものであり、乳利用を目的としたものではない。ただ、乳利用のための搾乳は、このような先行技法を前提として開発されたと述べたのだった。

ただ、このように考えると、乳利用のための搾乳という技法は、もとをただせば、母子間の授乳・哺乳関係の介助という現場で、緊急事態を乗り越える対応措置として開発されたことになる。しかもこの対応措置の技法が発生する現場、〈母子間の授乳・哺乳関係介助〉自体、群を人のキャンプ地に繋留することで必然的に生じた日帰り放牧、それによって起こった出産時点における母子の相互認知の不安定化[谷 1995]に起因している。こうして、因果の連鎖は遡って、地中海地域から中近東にかけて開始された家畜化という出来事のなかで発生した母子の相互認知の不安定化というものにゆきつくことになる。

ここで最後に、東南アジアやオセアニアで、なぜ乳利用というものが独自に開発されなかったかについて、簡単な考察を加えておきたい。

まず、東南アジアからオセアニアにかけての地域について家畜飼養のあり方を、乳利用を實現した中近東での家畜飼養の仕方と比較してみよう。そこで、たしかに最初に思い付くことは、東南アジアやオセアニアで飼養されている家畜が牛や水牛であるということだろう。牛や水牛は、羊や山羊のように大量の群として放牧飼養されるよりは、それぞれの定着的な家族単位によって、少数飼養されるのが一般である。ただ飼養されている主要家畜種の差異で、乳利用の有無を十分に説明しようとは思えない。中近東やインドでも、牛や水牛は有畜農家によって保有されている。ところがこの地域では、羊・山羊と同様、牛や水牛も搾乳対象となっている。家畜種の差異だけで、搾乳欠如は説明できない。

では、搾乳技術の発想の欠如にとって、いったいどのような差異が注目されるべきか。ここで、中近東での「乳利用のための搾乳」というものが発想される先行前提知というものをもういちど見直してみよう。その前提知とは、〈実子への授乳状況の見立て〉を介して、〈乳雌の授乳許容態度を誘発する〉ことで、〈実子以外のものへの乳雌の授乳許容〉の糸口がつかめるといったものであった。そしてその知識は、新生児の授乳・哺乳関係介助過程で、ときに発生する実母・実子間の授乳・哺乳関係の不成立という緊急事態のもとでえられた。つまり〈実母・実子間の授乳・哺乳関係介助〉という群管理文脈のもとで発生しており、この管理文脈自体が、もとをただせば群を人の居留地に繋留することの結果生じた〈長距離の日帰り放牧〉、〈出産時での母子間の授乳・哺乳関係の不安定化〉に起因していた。

ここで、東南アジアやオセアニアでの家畜飼養の特徴を見てみよう。そこでは一家族が保有する牛や水牛の数はさして多くはない。しかもこれらの牛や水牛の飼養者は、毎日強制的な移動放牧に連れ出すというより、キャンプ地の周辺の草地で放し飼いをしているというのが一般である。降雨量の多いこの地域では、長距離の放牧自体が不要で、必要とあらば近くの草を刈って与えればよい。出産まぎわになった雌は、予め木につなぎ止めたり、畜舎にとどめおき、周辺にある豊富な草をとってきて当てがうことですませうる。このような状況下では、実母・実子間の相互認知を不安定化する要因はさしてないのである。中近東の羊・山羊群で

みた実母・実子間の相互認知の不安定化は、なによりもそれが毎日長距離の日帰り放牧を強いられ、帰幕後も百頭も二百頭もの乳雌が過密により集まっているなかで母子の出会いが企図されるということのために引き起こされていた。それに対して、東南アジアでは、乾燥した中近東で行われる大群の長距離放牧、そしてそれがもたらす母子の授乳・哺乳関係の不安定化という要因がないとすれば、搾乳の発想の契機となる授乳・哺乳介助それ自体が必要ないことになる。必要は発明の母というが、そこでは発明をうながす必要が存在しなかった可能性が高い。東南アジアやオセアニアでの牛や水牛の飼養者のもとで、たとえ人と家畜個体間に親和性が成立していようと、搾乳の技法が独自に開発されなかった背景には、その飼養条件があったというのが、筆者の考えである。

もちろん、東南アジアにおける乳利用欠如の理由としては、これ以外にもオードリークールが指摘するような乳に対する文化的な価値づけでの差異も考慮されねばならないだろう。ただここで言いたかったことは、乳に対する文化的価値づけより前に、搾乳技法の成立へと人を導く飼育条件上の差異の問題があるということである。乾燥した中近東では、放牧による以外、舎飼いによって大量の家畜に草を支給することはできない。こうして放牧が必然化されるのだが、同時に周辺にある巨大な乾燥草原は羊・山羊を一挙に多数飼養することを可能にした。ただそのことが、実母・実子間の授乳・哺乳関係の不安定化をうみ、めぐりめぐって搾乳による乳利用への道を開くことになった。ところが、東南アジアやオセアニアでは、そのような技法の発生を促すことになる状況自体がなかった。いかにして乳利用が開始されたか、その背景的な経緯を明らかにする作業は、東南アジアやオセアニアでの乳利用欠如の背景をもあるていどは説明しうるかに思えるのである。

ところでこのようにして開発された乳利用の開始がもたらした意味は、さまざまな領域で指摘できる。それは、新たな食資源の招来にとどまらず、群管理の文脈でも、考古学者の注目した間引き戦略にくわえて、集中的な母子分離といったあらたな技法の導入をもたらしたと考えられる。また、雌は母群に残すのに対して、雄はもっぱら貢納資源ないし流通資源として外部に出すという、〈広義の流通財としての雄・雌におうじた差異の顕在化〉をもたらした。

しかしこれら容易に考えられる意味とは別に、乳利用の開始が、まさに動物資源によって生を維持する方法での大きな変革を意味したことを忘れてはならない。それは、狩猟段階から維持され、家畜化段階に入ってもなお変わることもなかった、〈殺しを介して動物食資源をうる〉という食資源の獲得法にたいして、乳利用の開始は、〈殺しを介さずに動物食資源をうる〉可能性を開いたということである。そこでは、殺しを必然的にともなう肉食という生活原則を否定的対立項とし、それを回避した菜食主義的生活原則をたてて、それにポジティブな価値をあたえることが可能となる。興味あることに、理想的な食生活としての菜食主義は、ヒンドゥーのアヒンサという主張以外に、旧約聖書の創世記にも見いだすことができ、それらはいずれも乳利用地域での出来事なのである。ところが、乳利用のない東南アジアやオセアニアの人々は、いわゆる動物食が少ないという意味で〈植物食い(phytophage)〉ということは

できても、イデオロギーとしての菜食主義(vegetarianism)をたてた人々とは言えない。われわれは生命的自然対象を消費することでしか生きえない。そのようなわれわれの生の条件下で、乳利用の開始は、この地域の人びとをして、〈流血をともなわない食〉と〈流血をともなう食〉という二項対立的範列(清/穢または無罪/罪)の措定を促し、自己の存在にかかわる問題として〈殺しを巡る倫理〉を対自化させる道をも開いたと言えないか。乳利用技法の成立は、自己の生を支える自然に対するナチュラル・イデオロギーという文脈でも、無視できない文明史的出来事だったと見なしたいのである。

参考文献

- Amoroso, E.C. & P.A. Jewell (1963) The Exploitation of the Milk-Ejection Reflex by Primitive People. In : Mourant, A.E. & F.E. Zeuner (ed) *Man and Cattle*.
- Beck, L. (1991) *Nomad, A Year in the Life of a Qasgā'ī Tribesman in Iran*. Berkeley.
- Bökönyi, S. H. (1969) Archaeological Problems and Methods of Recognizing Animal Domestication. In : Ucko, P. J. & G. W. Dimbley (ed) *The Domestication and Exploitation of Plants and Animals*. London. Duckworth, 218-229.
- Bökönyi, S.H. (1989) Definition of Animal Domestication. In : Clutton-Brock, J. (ed) *The Walking Larder*. London. Unwin Hyman, 22-27.
- Davis, S. (1984) The Advent of Milk and Wool Production in Western Iran : Some Speculation. In : Clutton-Brock, J. & C. Grigson (ed) *Animals and Archaeology 3 : Early Herder and Their Flocks. British Archaeological Reports International Series 202*. Oxford, 265-278.
- Davis, S. (1993) The Zoo-Archaeology of Sheep and Goat in Mesopotamia, In : *Domestic animals of Mesopotamia, Part 1. Bulletin on Sumerian Agriculture VI*. Cambridge.
- Digard, J-P. (1981) *Techniques des Nomades Baxtyāri d'Iran*. Cambridge U.P.
- Ducos, P. (1978) "Domestication" Defined and Methodological Approaches to Its Recognition in Faunal Assemblages. In : Meadow, R.H. & M.A. Zeder (ed) *Approaches to Faunal Analysis in the Middle East. Peabody Museum Bulletin*. Harvard, 53-61.
- Greenfield, H.J. (1988) The Origins of Milk and Wool Production in the Old World. *Current Anthropology* 29, 573-593.
- Haudricourt, A. (1977) Note d'Ethnozoologie: Le Role des Excretats Dans la domestication. *L'Homme* 17 (2-3), 125-126.
- Haudricourt, A. (1978) Ecologie et Agriculture Asiatiques. *La Pensée* 198, 131-132.
- 小長谷有紀 (1983) モンゴルにおける家畜への呼びかけ 京都大学地理学教室 (編) 『空間・景観・イメージ』 地人書房.
- 小長谷有紀 (1991 a) モンゴルにおけるウマ, ウシ, ヒツジの搾乳儀礼 『国立民族学博物館研究報告』 16-3.
- 小長谷有紀 (1991 b) 『モンゴルの春』 河出書房新社.
- 小林繁樹 (1990) スイスの哺乳桶 『リトルワールド』 33 (野外博物館・リトルワールド).

- 松原正毅(1983)『遊牧の世界—トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』中央公論社.
- Meadow, R.H. (1979) Early Animal Domestication in South Asia : A First Report of the Faunal Remains from Mehrgarh, Pakistan. In : H. Hortel (ed) *South Asian Archeology*. Berlin, 143-179.
- Meadow, R.H. (1984) Animal Domestication in the Middle East: A View from the Eastern Margin. In : Clutton-Brock, J. & C. Grigson (ed) *Early Herder and Their Flock. BAR International Series 202*. Oxford, 309-331.
- Meadow, R.H. (1989) Osteological Evidence for the Process of Animal Domestication. In : Clutton-Brock, J. (ed.). *The Walking Larder*. London. Unwin Hyman, 80-90.
- Ryder, M.L. (1993) Sheep and Goat with Particular Reference to Textile and Milk Production. In : Postage, J.N. & M.A. Powell (ed) *Domestic Animals of Mesopotamia*. Cambridge, 9-32.
- Scrimshaw, N.S. & E.D. Murray (1990) *The Acceptability of Milk and Milk Products in Populations with a High Prevalence of Lactose Intolerance*. The American Society of Clinical Nutrition. Rockville Pike. USA (木村修一, 和仁明 (監訳) 『乳糖不耐症と乳・乳製品の消化能』雪印株式会社・健康生活研究所).
- Tani, Y. (1982) Implication of the Shepherd's Social and Communicational Interventions in the Flock — From the Field Observation among the Shepherds in Roumania —. In : Tani, Y. (ed) *Preliminary Report of Comparative Studies on the Agrico-Pastoral Peoples in Southwestern Eurasia*. Research Institute for the Humanistic Studies. Kyoto Univ., 1-18.
- 谷 泰(1977) イタリア中部山村移牧羊の管理について—主にアブルツツォ・チェルクエト村調査より 会田・梅棹(編)『ヨーロッパの社会と文化』京都大学人文科学研究所.
- 谷 泰(1995)考古学的意味での家畜化とは何であったか—人-羊・山羊間のインターアクションの過程として『人文学報』76. 京都大学人文科学研究所, 229-274.
- Trinchieri, R. (1941) *Vita di Pastori nella Campagna Romana*. Roma. Fratelli Palombi.
- 梅棹忠夫(1966) Datoga 牧畜社会における家族と家畜 川喜田, 梅棹, 上山(編)『人間—人類学的研究(今西錦司博士還暦記念論文集)』中央公論社.

(京都大学人文科学研究所)